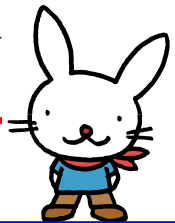




# We こ た つ

Love



— 日本福祉大学 子ども発達学部ニュースレター —

## 第3回 新入生セミナーが実施される!

— 上級生アシスタントが今年も新入生をサポート —



第5号 2010年7月1日発行

今年も、恒例の子ども発達学部の新入セミナーが4月14日(水)・15日(木)と実施され、愛知県の西浦温泉にバス8台を連ねて行ってきました。新入生329名、教職員24名、上級生アシスタント14名の総勢367名による一大イベントです。初日は、①学科毎に分かれての講演会、②上級生による学生生活ア

ドバイス、③クラス別交流会などが行われ、最後は大広間で夕食をいただきました。1人暮らしをはじめから、久しぶりのご馳走に大大満足～!!と大はしゃぎ。何せ量も多く、食べきれない人も・・・。

2日目は、碧南市の体育館でドッジビーのクラス別対抗戦が行われました。決勝戦は大いに盛り上がり、接戦の末、見事に遠藤クラスが優勝を勝ち取りました。

実施後に行った学生の満足度アンケートでは、非常に良かった67%、普通だった32%、非常に悪かった1%という結果になりました。皆さん、友だちを沢山、作れたようです。来年度は、上級生アシスタントとして参加してくれることを期待しています。



碧南市臨海体育館にて



堀田あけみ先生の講演に聞き入る学生達



圧巻! 大広間での夕食

## 上級生アシスタントに参加して

子ども発達学科 2年 水谷豊

昨年、新入生として参加したこの新入生春季セミナー。今回は自らが中心となって企画をし、運営をしていく立場となりました。とても大変な仕事でした。うまくいかないことや、難しさを痛感しました。しかしながら、そのなかで今回の新入生春季セミナーはとてもいい経験ができました。

まず一日目のグループ発表は各部屋によって、様々な反応がありました。どんどん手を挙げて意見を言ってくれる部屋、大きな声を出して笑ってくれたり、リアクションをとってくれる部屋。こちら側からたくさん投げかけるまでは、冷静に見ている部屋など誰が仕組んだわけもなく、このようにはっきりと大きくタイプがわかれましました。その中で私たちは、同じ内容の発表をしなくてはなりません。様々なタイプの部屋で発表をしていくうちに、同じ内容でもいかにうまく聞いている人たちに伝えることができるかを考え、瞬時に判断する力が多少なりとも身についた気がします。この経験は、今後の学校生活やその他のいろいろな場面で役に立つと思います。

そしてなによりいい経験だったことは、みんなで一つのことをやり遂げたことです。少ない時間で話し合いをし、なかなか打ち合わせができないなかで、各グループが発表の準備を進めていき、一日目と二日目のドッジビーともに成功させることができました。新入生も楽しんでくれました。楽しそうな表情を見たとき、とても気持ちよくなりました。

今回の新入生春季セミナーを通して、少しでも新入生のみなさんになにかが伝わっていればいいと思います。このような貴重な体験をできたことに感謝したいです。



上級生アシスタントの自己紹介



Nihonfukushi University

## 2年生の美浜町での学校体験が無事終了！

— 学校からは学生の受入枠を増やしたいとの声も… —



私は上野間小学校にインターンシップに行かせていただいています。上野間小学校では、授業に参加させてもらうことはもちろんですが、その他に子どもたちが提出した宿題の採点・丸付けなどの仕事や学校の周りの木の剪定といった仕事、また、羊の毛刈りという貴重な体験もさせていただきました。

また、私は今度、音楽の授業で伴奏をさせていただくことになりました。大変なこともあります、経験を積みながら楽しく過ごし

ています。私は週に1日、1日にいる時間は3~4時間程度であり、また、授業を行うわけではないので指導案を書いているわけではなく、教師のすべての仕事を体験したわけではありませんが、教師という仕事は授業以外の仕事も多く、頭で考えていた以上にとっても大変だと実感しました。今以上のことが毎日続くと思うと自分はやっていけるか不安になりましたが、同時にとてもやりがいのある仕事だと感じました。



森下 雄介(子ども発達学科 初等教育専修 2年)

## 2年次の保育所実習を終えて・・・

— 3歳児未満クラス、3歳児以上クラスで各2週間実習 —

私は昨年度の11月と2月に保育実習に行きました。私は近所の保育園での実習となりました。私は0~2歳児クラスと3~5歳児クラスの配属でした。最初は失敗ばかりで記録を書くのに必死でした。しかし、少しずつ慣れてきてやれることが増えていくという貴重な経験をする事が出来ました。

一日または半日の責任実習は計画をたてるのも一苦勞でしたが、子ども達が笑顔で活動に参加してくれて嬉しかったです。



今後実習に行く一・二年生の皆さん！実習の準備は早すぎないが丁度いいです！そうじゃないと実習に行く時に困る事だらけになってしまいます。特に記録の書き方、計画案の立て方は色々なものを見ておくといいですよ。あと、日々疲れているし仕方ないといいたいです、記録の漢字ミスはしないように注意してください。記録を書くときは辞書を片手に！



門田 千緩(子ども発達学科 保育専修 3年)

## — 美術の教室から —



初夏のさわやかな風が教室に吹き込むころになると、図画工作では粘土を用いた演習が行われます。ヒンヤリとした粘土の触りは心地よく、子どもたちが泥団子作りに夢中

になる気持ちがよく理解できます。この授業の目的は、保育者・教師として、子ども(利用者)の造形表現を支援するために必要な知識・技能を身につけていくことです。図画工作(美術)は、人によって得意・不得意がはっきりした科目です。事実、初めての授業では少し硬い表情で教室に入ってくる人も少なくありません。しかし、子ども(利用者)を「支援するために必要なこと」という方向から考えてみると、教室で行われることが石膏デッサンや油絵の製作ではないことが分かります。子どもの生活に寄り添い発達を支援していく専門職になるために必要なことを、この教室で皆さんとともに考えていきたいと思ひます。



守山均(子ども発達学科 保育専修長)

## 心理臨床学科「生理心理学演習」

— 身体の反応を自分でコントロールする —

2年生の心理学実験・実習の生理心理学演習では、「心と身体の関係」がテーマになります。手の発汗や指先の冷感、心拍数などをモニターしてみると、ほんの少しの心の動きやストレスによって身体(自律神経系)が敏感に反応していることがわかります。この授業でめざしているのは、身体の反応を自分でコントロールすることによって、心身にリラックス状態をつくることです。写真は、自己暗示(自律訓練法)やイメージを使うことによって指先の温度を上昇させる練習をおこなっている



ところですが、すぐに思いどおりにはいかないようです。

大饗 広之

(心理臨床学科 教授)



## 子ども発達学科

### —子ども発達学専門演習Ⅰ（小林ゼミ）紹介—

小林ゼミでは、四つの柱を立てて研究し、学び合っています。

- ①実践記録の読みや分析を通しての学び
- ②教師としての実践力をつける実演的な学び
- ③文学・詩を通しての学び
- ④現場との交流を通しての学び

前期は、主として「教師の実践と授業」と「文学と教育」をテーマとして、新聞記事の論評や実践記録の分析や読みと



りをしています。毎回、30秒スピーチから始め、ゼミ内の交流を深めたり、人前で話す練習にもなっています。ゼミでは、話す、聞く、目線をつけるなど、人を惹きつけることなどが学べます。教師としての力量に役立っていくと思っています。

またグループに分かれてレポートを作り発表し合っています。「小林ゼミは、一人一人が、意見を言えるし、他の人の考えを聞き合える場になっている」という感想が多いです。

安藤 ゆう子(子ども発達学科 初等教育専修 3年)※ゼミ長

## 心理臨床学科

### —子ども発達学専門演習Ⅰ（堀ゼミ）紹介—



子ども発達学専門演習Ⅰ堀ゼミは「発達障害児の理解と支援—発達臨床心理学の視点から—」をテーマとして4月から始まったばかりです。後期以降に予定されている小学校での実習を前に、現在は文献を使って発表とディスカッションで発達障害への理解を深めている最中。時には眉間にしわを寄せ、時には笑顔でちょっとややこしい内容にもみな真剣に取り組んでいます(…よね)。「先生」という立場からだけでなく、さまざまな立場から発達障害をとらえ、臨床心理学的視点から理解できるようになってもらいたいと思っています。

先輩にあたる4年生(社福堀ゼミ)は、小学校での子どもたちとの関わりを元に、夏休みに子どもたちを招いてのサ



マースクール(通算第3回目)を企画中です。一昨年は7号館全体を使っての宝探しゲームや親子でのカード作りなどをしました。これから、各ゼミ生たちが子どもたちの“楽しい”体験をどう作っていくのが楽しみです。

堀 美和子(心理臨床学科 准教授)

## 第2回子ども発達学部FDフォーラム

### —イブに亀谷学部長がサンタ姿で登場—

2009年12月24日に、第2回子ども発達学部FDフォーラム「あなたにとって大学とは？本音でトーク第2弾」を実施しました。学生23名、教職員20名の参加者を得て、自由な雰囲気の中、本音でトークを繰り広げました。コーヒープレイク時にはサンタク



ローズ姿の亀谷学部長の登場に、大いに盛り上がりました。亀谷先生からは、次のようなコメントをいただいています。

この形式のFDフォーラムは前年度に引き続き2回目です。クリスマス・イヴの夕方にもかかわらず、43名の教職員・学生が参加し、ささやかながらも充実したフォーラムとなりました。

学生は、まず、くじ引きで5つのグループになり、学生生活や遊びと学び、出会い、将来のこと等、グループごとに「本音トーク」を目指しました。最初は、なかなか本音トーク・核心に迫った議論がでにくい状況でした。しかし、下宿での一人暮らしの生活は大変なことやら、学ぶ「構え」がないと講義は能動的に聞けない、など、徐々に本音が出始めた途中のティータイムの時間、私こと亀谷(学部長)が、SANNTAのコスプレでサプライズな登場をしました。実は、サンタになったのは、2回目で、昔、息子の通っていた保育園で、保護者としてやった経験がありました。最後のあいさつで、私が、いちばん本音トークをしたかもしれせん。保育専修の学生は感性的に、初等教育専修の学生は理知的に、心理臨床の学生は自己省察的に学ぶという側面があるかもしれないが、大学というところは、自主自立、一身独立で、今後も頑張ってもらいたい、とカッコよく締めくくりました。

亀谷 和史(子ども発達学部長)

※FDとは、Faculty Developmentの略で、授業方法や教育内容の改善の取り組みをいいます

## 日本福祉大学付属高等学校で 学生がプレゼンテーションを行う -ビーチランドでの活動内容を付属高校で発表-



12月15日(火)に子ども発達学部の2年生が、付属高等学校からの要請を受け、高校の体育館で生徒約140人を前に、パワーポイントを使ったプレゼンテーションを行いま

した。急な依頼にもかかわらず、4名の子ども発達学部の学生が快く引き受けてくれました。子ども発達学科の塩野谷ゼミの近藤有加

さんと甲田梨紗さんは、ビーチランド・南知多おもちゃ王国のイベントステージで行った「忍者ごっこ企画」について、心理臨床学科の中村ゼミの永谷加奈さんと谷野悠子さんはビーチランドの来場者を対象に行った、「色彩調査アンケートの結果」について、それぞれプレゼンテーションを行いました。まだまだ、不慣れなところもありましたが、写真やグラフなどを用い、高校生に対して自分たちが取り組んでいる活動内容を伝えることができたと思います。「忍者ごっこ」企画のプレゼンテーションでは、冒頭に「手遊び」を取り入れるなど、子ども発達学科の学生らしい工夫も見られました。

この企画は、付属高校と大学との連携・協力(青年期一貫教育)の一つに位置付けられており、今年の12月にも子ども発達学部の学生によるプレゼンテーションが行われる予定です。

## 「保育内容研究Ⅲ（生活と環境）」 の授業で栽培活動を実施！

-2010年夏に本格的に開墾予定-



この4月から15号館横の空き地にて、牛乳パックやポットを使った栽培を行っています。今ではトマトやナス等が収穫できます。この夏には、土を入れ替えて畑を

耕す予定で、来年度からは本格的に栽培をする計画です。子どもの自然体験や直接体験を保障できる保育者になって欲しいと願っています。

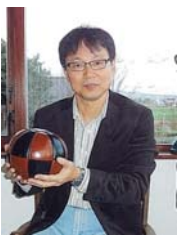
東内瑠里子(子ども発達学科 准教授)



※ 菜園予定地 →



## 教員紹介



よした のりひさ  
吉田文久 (子ども発達学科)

長年勤めた短大から昨年4月に日本福祉大学に移ってきました。短大では味わえなかった、4年間の学びの中で学生たちが成長する姿をじっくり見ることができるのが楽しみです。本学では、「体育科指導法」という体育の授業づくりを学ぶ科目をはじめ、「アダプテッド・スポーツ」という障害のある子どもや大人の人たちのスポーツのあり方を学ぶ科目を担当しています。一方でサッカーとラグビーのルーツといわれる民俗フットボールの研究を英国に調査に出かけて行っています。多くの人がスポーツのことを深く学び、そのおもしろさを味わう場や機会をつくるのが私の役割だと思っています。



こだいら ひでし  
小平英志 (心理臨床学科)

専門は、教育心理学と人格心理学ということになっています。言われてみればその辺が興味を中心なのですが、幼稚園児の紙芝居への反応、小学生の授業行動、青年期の自己イメージやアルバイト活動、旅行行動の研究などにも手を染め、何だかよくわからなくなっています。この前、ある学生さんに「先生は何の専門家かわかりません」と言われました。やっぱり。でも、興味を持ったものをとりあえず調べてみるところが長所なんです。きっと。たぶん。

## ★ 1年生の作った詩コーナー ★

大学生 1人暮らし 新しい友達 楽しい楽しい日々  
「ただいま」と言った時に気づく さびしさと 家族のあたたかさ

ニュースレターのタイトル「We ♥ こたつ」は、学生からの公募で決定しました。子ども発達(「こどもはっ「たつ」)の「こたつ」です。暖かい団欒のイメージと重ねているそうです。



編集長：亀谷和史(学部長)  
編集委員：遠藤由美(子ども発達学科)  
小林信次(子ども発達学科)  
東内瑠里子(子ども発達学科)  
吉原智恵子(心理臨床学科)

